

第 27 回 いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 講評

今回の課題絵本 Leaf は、森に流れ着いたシロクマを、最初は警戒するものの、最後は動物たちみんなで力を合わせ北の故郷へ帰す、というストーリーだけ見ればシンプルな物語です。最初のページの暗い海にぼつんと描かれたシロクマの姿や、洞窟でシロクマが流す涙を見て、ハラハラした子ども読者も、最後のシロクマのほっとした表情を見て胸をなでおろすのではないのでしょうか。

一方で、物語の背景には、地球温暖化や、異質な他者の受容、コミュニケーションの大切さなど、現代的なテーマが隠されています。今はそうした知識のない子ども読者も、数年後に、シロクマが暮らしているところでは氷がとけているというこの絵本の一文をハッと思い出す日がくるかもしれません。シロクマの孤独に寄り添う子どももいれば、最初シロクマを怖がってしまった森の動物たちのほうに共感する子どももいるでしょう。美しいイラストに、重層的なテキストを持つ、すぐれた絵本だと思います。二次審査でチェックさせていただいた作品は、字面だけでなく、そうした深い読みに基づいて訳されたものばかりで、たいへん読みごたえがありました。ありがとうございます。

一次審査では、

- ・読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
- ・絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）
- ・誤訳はないか
- ・原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
- ・誤った日本語が使用されていないか
- ・誤字脱字はないか
- ・不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか

などの基本的なことに加え、文法を中心に間違いやすいところなど40近くのチェックポイントを作り、チェックしました。主なもの（間違いが多かったもの）をいくつか、例として挙げておきます。

3 ページ made its home in 「～にすむ」「～にすみつく」という意味が読み取れているか。

「家を作る」はNG。

7 ページ No one, they thought, should have to live in fear. 「should have to」のニュアンスが読み取れているか。

8 ページ NEEDS TO GO! この言葉の主語が「Leaf」であることを読み取れているか。

14 ページ DESTRUCTIVE! Leafを表している言葉。不自然にならないように。

19 ページ at last they all listened 「they all」は、カラスたちではなく、森の動物みんなであることに注意。

21 ページ drifted over 「流されてきた」というニュアンス。能動的に海をわたってきたと読める訳はNG。

22 ページ Just someone～ Just は前ページの「only」と同じニュアンス。someone は Leaf であることに注意。

こうしたチェックを経て、**780応募作品中31作品**が最終選考に進みました。

最終選考では、一步踏みこんで絵本のテーマや魅力をじゅうぶん伝えられているかどうか、そして、日本語として耳で聞いて心地よいか、声に出して読んで楽しいか（絵本は読み聞かせることも多く、耳で楽しむ文芸でもあると思います）といったことを、審査しました。

今回審査するにあたって、一番悩んだのは、7ページの

They named him LEAF, not only after the creature's odd habit, but because they wanted him to leave.

の一文でした。

二次審査に残った方々はみなさん、これが掛詞であることはわかっていらっしやっただと思います。その上で、

- ①原文通りに訳し、ルビ（リーフ／リーブなど）を振る。
- ②原文とは少し離れるが、自然な日本語の掛詞になるよう訳す。
- ③不自然な日本語になるのを避け、掛詞を無理やり訳さずストーリーの流れのほうを重視する。

の三つのうちいずれかの方法で訳していらっしやる方がほとんどでした。

今回の絵本の場合、読み聞かせるなら五歳前後の読者からでも十分楽しめると思います（注：英語圏では三歳からになっています。ただ、「対象年齢」はあくまで目安であって、本当は、楽しめる年齢はひとりひとりちがうと思います）。その場合、①ですと、幼い子どもには意味がわからないでしょう。物語の流れも一度断ち切られてしまうと思います。

②がベストであることは間違いないでしょう。ただ、これは至難の業です。不自然だったり、この箇所だけ説明文のようになってしまっている訳文もありました。また、シロクマの名前は物語中で何度も繰り返されるので、文体から浮き上がってしまうもの、シロクマのキャラクターと合わないものは、ふさわしくないと思います。その中で、工夫なさっているなと思った方々のものをいくつか紹介します。

「サッサというなまえでよぶことにしました。いつもはっぱをサッサとかきあつめているから…だけじゃなくて、サッサとどこかへ行ってほしかったからです」

「そのいきものに バサラという なまえを つけた。いつも おかしなことを しているから だけじゃない。そのいきものと おサラバ したかったんだ」

「そのけものに『ハッパッパ』というあだなを つけました。いつも はっぱを あつめているし、それに ここから ぱっぱと いなくなってほしかったからです」

「ハッパというあだ名をつけた。葉っぱをあつめるへんなくせがあったから。でも、それだ

けではない。葉っぱみたいにひらひらと、どこかへ飛んで行ってほしかったからだ」

「ばっばといなくなっほしい」「葉っぱのように飛んで行ってほしい」から「ハッパ」という名を採用している方は複数いらっしゃいました。「リーフ」と音感は違うものの、あだ名としても「ハッパ」ならば通用すると思います。

今回、このように工夫されている方の訳は、高く評価しました。

一方で、③を選んだ方々もいらっしゃいます。

「どうぶつたちは そいつを リーフって よぶようになった。はっば っていう いみだ。はっばあつめなんて おかしなことばかり やっていたから。みんな、リーフに でて 行ってほしくて たまらなかった」

「どうぶつたちは そのけものに 『リーフ』という あだ名をつけました。はっば という いみです。はっばを あつめてばかりいる けものなんて ほかには いませんでしたから。どうぶつたちは リーフに さっさと 森から たちさってほしい と おもっていました」

掛詞が生かされていないのは残念ですが、物語の流れ——Leaf が葉を集めてばかりいること、動物たちは Leaf に立ち去ってほしいと思っていること——が自然で、違和感がありません。

どんなジャンルの翻訳もですが、児童書（絵本）は特に読者を強く意識しながら訳文を練っていくこととなります。その際、③の方法を敢えて選ぶこともあると思います（実際の現場でも採られている方法です）。

二次審査に残った作品は誤訳もほとんどありません。あとは、ストーリーへの理解の深さや、物語の流れをうまく伝えているかどうか、などを評価しました。

例えば、11 ページの…Leaf leaped off the edge of the hill and flew…～のシーンです。この時点ではまだ、リーフが葉を集めている理由は定かではありません。ですが、あとにつなげるためにもリーフが飛ぼうとした（＝湖に飛びこもうとしたわけではない）ことをわかった上で訳さないなりません。つまり、「とびおりた」などの訳はふさわしくないことになります。

また、ここは「…」の“ため”も活かしたいところです。「そらをとんだ……とおもったけれど、すぐに みずうみに おっこちてしまった」という大賞の方の訳は、イラストとの兼ね合いも含め、声を出して読みやすい訳だと思います。

ストーリーの流れに関しては、3 ページの and no one dared approach now を「いまではもう だれも ちかづこうとしない」（特別賞の方の訳）のようにリーフが住み着いたせいで因果関係がはっきりする訳のほうを評価しました。15 ページの This time he didn't stop running at the hill～の一文も、今度は湖ではなく、海までずっと走って行って勢いをつけて飛びこんだ、ということがわかるように訳してほしいところです（単に「丘を越えて～」

のように訳すと伝わりにくそうです)。19 ページの at last they all listened も、ようやくみんな(カラスだけではない) がリーフの話を書く気になったことが伝わると思います。

そして、最後の～no polar bear would ever get lost again は、単にシロクマがまた家族と一っしょになれるというだけでなく、シロクマという動物がうち(故郷)を失わないといいという願いがこめられていると、よりいいエンディングになると思います。

耳で聴くという点では、細かいところですが、14 ページの Have you seen his TEETH? なども、「は」とせず「キバ」とするだけで俄然読みやすく、発音しやすくなると思います。隅々まで行き届いている訳だと感じました。

同じページの only that they didn't agree! も、「一」で付け加える形で書かれているニュアンスを読み取って、うまく訳している方のものが印象に残りました。「けっきょく、どうするかは きまらなかった。わかったのは、いけんが まとまらないってことだけだった」という大賞の方の訳は、それがよく伝わってくると思います。

「もりは よそもののはなしで もちきりだったけれど」(大賞の方)、「ギョロギョロと森を 見わたすたびに どうぶつたちは おそろしくなって にげだすのでした」(優秀賞の方)、「だれだって、おびえながらくらすなんてごめんですから」(特別賞の方)、「くらいほらあなに からだをまるめた」(特別賞の方)、「どうぶつたちは ふるえあがって にげだすのでした」(特別賞の方) など、それぞれの文体にあった自然な日本語を読むのは、楽しかったです。

他にも、すばらしいと思う訳はたくさんありました。最終的には、一部繰り返しになりますが、*誤訳が少ない*物語の流れを理解し、それを(勝手に文を足したり引いたりすることなく)読者に伝えている*自然な日本語である*耳でも聞きやすい*文体が統一されている*絵と矛盾していない*テーマを深く理解している、といった総合的な視点から評価するよう心掛けました。

最後に、わたし個人は、その作品への理解/思い入れが翻訳にはとても大切な要素だと考えています。翻訳とは精読である、とよく言いますが、まさに翻訳はその作品を味わい尽くせる楽しい作業だと思っています。また来年もぜひ参加してみてください!

英語部門 審査員 三辺律子